

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「孫子」の兵法と階級闘争……………2

羽田内閣の自主的総辞職で社党復帰か……………3

——あせり出したデモクラツ派が策動——……………6

都本部続開大会の経緯と展望……………6

◇瓢箪(ひょうたん)から駒(うま)◇……………7

律令 国家の構造……………7

能力主義教育をどう越える……………11

——日教組運動の現状と課題——……………13

拡大する非常勤雇用……………13

——郵政における非常勤雇用の問題点——……………15

リストラなんかに負けないゾ……………15

九四春闘の収支決算……………16

面白くなった「国労闘争団ニュース」……………17

読者からのおたより……………18

旬刊 社会通信

NO.574

一九九四年六月一日

一九九四年六月一日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

「孫子」の兵法と階級闘争

過日、京都を旅した。旅は生活の一部、鞆に「孫子」(岩波文庫)、「旅行鞆のなか」(吉村昭、文春文庫)、「図説日本のマス・コミュニケーション」(NHKブックス)、それになんにもつてもしよがないなと思いがら「憲法改正」批判(渡辺治他、労働旬報社)、「新・新・危機管理のノウハウ―世紀末の指導原理」(佐々淳行、文芸春秋)を詰め込んだ。駅のキオスクでは「読売」を購入、京王線、中央線で抜ける。なんだこれはの記事に「八党書記長クラスの座談会」、ノートにメモった久保書記長の発言は「第三の連立政権考へるべき、あとの政権像なしには総選挙はムリ」「やめれば羽田にも(首相の)資格」「小沢とは協調できる、障害になるとは思えない」と。これで五月二八日からの中央委方針がつけられるのだがその印象。

京都までは二時間四十分。ひかり車中では吉村氏の本からひもとく。氏の歴史小説はほぼ読んでいる。「長英逃亡」「破獄」「海の史劇」等々。とりわけ鮮烈な印象をもったのが、第二大戦下すめられたという黒部ダム工事をつづった「高熱隧道」だった。司馬遼太郎にはやさしさが、この人には強さがある。

「旅行鞆：」で興味をそそられたのが、商売柄だろうか、「小説家と銀行」「不思議な世界」。少年ジャンプ、赤川次郎君よりもはるかに面白い。

名古屋を過ぎるあたりで「マス・コミュニケーション」に移る。マスメディア、新聞、放送、出版、広告等の概況をまとめたものだ。今や第五の権力といわれるマスメディアだが売上高はきわめて小さい。新聞、二兆三五〇〇億、放送二兆七二〇〇億円という。トヨタの売上高が九兆円なのだから。わずか五兆円(GNPは約五〇〇兆円)で世論がつくれるのだから安いものだ。権力者がふくれあがったマスメディア操作に手練手管を弄するのがよく分かる。

京都で若い仲間と語り合い、東大阪へ。近鉄・奈良線車中では全通の職場状況、若い組合員の意識状況を聞く。この線は私の第二の故郷、学生時代四年で済むところ、五年間も「勉強」したのだから。

京では大先輩にも久しぶりに会った。「滝野君、明治維新前後に生まれてくればと思っていたが、今はその頃よりも面白いゾ。ぼくは七三、平均寿命からはあと三、四年しか生きられないが、十年生きて時代のゆくえを見定めるまで死ねないな」と。

これに備えるのが体制側からは佐々淳行氏。彼は警察庁出身の官僚で初代内閣安全保障室長を務めた人物で、これまで「完本危機管理のノウハウ」「新・危機管理のノウハウ」等の著作がある。三冊目の本だけに新味はないが、「民間政治臨調」「天皇の『権威』」に安定と統合を求めようとしていることに興味がわく。

ここ一カ月持ち歩いてるのが「孫子」だ。兵庫の佐野氏の愛読書、彼からはこれまでも「孫子の兵法勉強しないでは勝てません」と尻をたたかれていたのだけれど、ようやくと手にとることになった。たたかわずして勝つ、孫子の極意はここにあるのかも。有名な「彼れを知りて己れを知れば、百戦して殆うからず。彼れを知らずして己れを知れば、一勝一負す。彼れを知らず己れを知らざれば、戦う毎に必ず殆うし」は、謀攻篇の五にある。孫子を現段階の階級闘争に結びつける力はまだない。佐野氏にレクチャーを受けながら考えていきたいと思っている。

(滝野 忠)

羽田内閣の自主的総辞職で社党復帰か

——あせり出したデモクラッツ派が策動——

早期に内閣復帰の右派路線の勝利

五月二八、二九日に開かれた中央委員会は、羽田内閣不信任案の提出⇨現行中選挙区制での解散総選挙⇨社会党の議席増・党再生へ大きな第一歩という展望を自ら否定する方向で幕を閉じた。これは久保書記長を先頭とするデモクラッツ派（D派という）など右派と山岸連合会長派の「内閣復帰へ」の巻き返しに護憲派が後退したことを意味している。いよいよ社会党は新生、公明両党のめざす新々党の流れに抗しきれず、ずるずると内閣復帰路線上に押し上げられている。

全国の二十四道県の書記長クラスを中核とする中間・左派の「地方連合」は「内閣不信任決議案を提出・可決し、現行中選挙区制での衆院解散・総選挙に持ち込むのが先決。新生党とは再連携すべきではない」（日経）とする趣旨の決議案を提出したが取り下げた。何故取り下げたのか。

(1) D派が相殺をねらって「早期の内閣復帰を求める決議案」を提出していること。
 (2) 強行すれば中央委員多数で可決できる見通しだったが指導部からのD派中執（久保書記長を先頭に）総引き上げるといふ恫喝があったこと。(3) 村山委員長を支える国会議員団などのなかには連合単座の影響を強く受けており、不信任案の提出に踏み切れていないこと。(4) 党の地方県本部も一枚右とはいいがたく、連合側の各地での圧力に弱くなっていること、などが原因である。

今度の中央委員会で村山委員長が久保書記長に同調する場面がしばしばあって、久保・田辺・山岸氏らの早期内閣復帰論にかなり引きずられていることを暗に示していた。横路知事をかかえる党北海道本部の主流は横路新党構想（さきがけ、自民と日本新党の一部、社会党はD派、村山グループの一部が結集の対象）に与みしており、事実上のD派所屬となっている。

今度の中央委員会で左派・護憲派は論争では圧倒していたが、党の主体性の確立、今後の党再生の展望を示すということでは敗北したといわざるをえない。その点で全国の党員に再び落胆を与えた。勤労国民へもせっかく反動と重税内閣から離脱したのにまた「復帰」かとこれまた失望させることになった。共同通信調査での支持率が三月の八・五%からこの五月二十一日（中央委前）には一二・三%と上昇したのにまたまた下落することである。

中央委員会後さらに連立政府寄りに

社会党の大会とか中央委または全国代表者会議などの会議では一応の主体性をもった決議を決定したり、筋の通った答弁もあるが、しかし会議が終ると決議や要望意見、それに対する答弁はすっかり忘れられ、逆の方向に執行部が動く場合が多い。党内民主主義の存在しない党運営が多く行われてきた。例えばガズ抜きでも会議を開くのは良い方で、都合が悪い（執行部にとって）ときは機関会議の招集すらないのである。したがって今回の中央

委の「宣言」には、衆院解散・総選挙を求め、との方針も入っているが、それよりも「内閣への早期復帰」が前面に出され、社会党はいよいよ解体または分裂の方向性を強めることになる。

いま、社会党が羽田内閣から離脱して間もない（まだ一カ月）のに再び連立内閣に復帰（入閣）するということはどういうことであろうか。またどういふ結果を社会党にもたらすであろうか。

まず第一にはなんといつても、復帰をいうのには早すぎるということである。村山委員長や久保書記長が激しく非難したのは、連立与党の政治手法であり、与党間の信頼関係が喪失したからだといひ、羽田政権に戻ることはありえないと公言している。それでは与党（ことに一・一ラインと大内民社委員長）の政治手法が民主的になり、反省しているといふのであろうか。少しも変わっていない。社会党離脱の直接の原因である与党統一会派「改新」を解消しようという正式の意見もない。大内民社委員長にいたっては「改新」について批判されているが、（政界再編に向けた）長期的な視野に立てば生きてくる」と開き直っているのである（五月三〇日・日経）。それなのに久保書記長は「内閣の不信任案の提出を待たず羽田内閣が自ら総辞職すれば、再び連立参加の協議に応じるし、羽田首相の再登板でも構わない」、といっている。まことに安易な政権論である。

これに対して党内外からゴウゴウたる批判がでている。当然のことである。久保書記長を先頭とする右派（D派など）の厚顔無恥にはあきればかりである。五月二十九日の朝日新聞の投書欄に中学教員の方の意見がでている。勤労者一般を代表する考え方であると思ふので引用する。

「社会党の政権復帰は慎重の上にも慎重を期して検討されなければならないと思う。苦し紛れの与党の甘言のつて安易に連立政権に参加するようなことがあれば、天下の公党が再び公衆の面前で大恥をかくこと火を見るよりも明らかである。（中略）今日このままでの政権復帰は、いじめられるためにいじめの世界に戻るようなもので今度は社会党の良識が問われることになる。政治改革という名の衣をまとった、問答無用の強権体質の改善なしに社会党の政権復帰は考えられない。政権与党の良識もそのことで悩んでいるはずである。また自分のことのみには捕らわれて友人（新党さきがけ）の存在を忘れてしまつては日本新党の轍を踏むことは明らかである。風雲急を告げる状況ではあるが、いまこそ足腰を鍛え、どうすることが真に国民のためになることなのかを友人と共に真剣に検討してもらいたい」（栃木県・室井至大・四九歳）。

今度の中央委員の七割方は久保構想（総辞職・復帰）に反対であるという。それでも離脱一カ月にして政権復帰を考えるのはなんのためか。

(一) 中選挙区制（現行の）で総選挙をやれば「小選挙区比例代表並立制」が廃棄される可能性があること。そうなれば政党再編のために容認してきたD派をはじめとする右派のリベラル新党構想がダメになる。国会を現行中選挙区制で解散させないためには、少数与党である羽田内閣を安定したものにすることがある。そのために社会党の早期復帰が欠かせない。うまく展開すれば自民党の一部（渡辺派）も巻き込める、とD派の首領たちは考えているのであろう。

(二) 小選挙区制で当選するためには、大臣または政務次官になることが望ましいわけで、右派には大臣候補（自選の場合が多い）が多く存在する。小選挙区の候補となり当選する

ためには、新生党と公明党との連合が必要であり、政権復帰はどうしても果たさなければならぬ。新党さきがけや日本新党と組んでもプラス（選挙の）にならない。

(三) 社民リベラル新党構想にも二つの流れがある。その一つは武村新党さきがけ代表のいうおだやかな多党構想である。そのため小沢・新生、市川・公明とは決して一つの党にはならない。社会党D派（田辺、山岸、久保氏らの）の新党は過渡的には「リベラル新党」だが、これは最初から小沢氏らの新々党と連合して選挙をたたかうというものである。そのためにもD派としては政権に復帰しておく必要がある。

(四) 財界の意向はいまでもなく、小選挙区制による保守二大政党制政治である。これを崩すような現行中選挙区制による選挙は許せない、ということによって財界は全力で各党に働きかけている。連合山岸氏や鷲尾事務局長などへの働きかけもひんばんであるという。自民党も現行の解散はなしで黙認することになったと伝えられている。

解体と分裂のハシリ、社民連と日本新党

一六年前に社会党から社公民路線推進の立場で離党（旧江田派の一部）して結成した社民連は政党再編Ⅱ保守二大政党化の波を浴びて五月二二日に解散した。全国代表者会議で解散と共に日本新党と合併も決議したという。しかしすでに五人の国会議員はバラバラに各党に加入しており、数千人の党員も大部分は日本新党にというよりも党員をやめるということのようにだ。

社民連の解散会議でも議論になったが、「いま何故分裂最中の日本新党に合併するのか」、「支持率の下がっている日本新党と合併して何が残るのか」などという批判が阿部書記長と江田代表に集中したが、まともな答弁はなかったという。答えようもないわけで、すでに五人の国会議員はバラバラになっている。菅直人代議士は新党さきがけへ、檜代議士は無所属で社会党に残り、田参議院議員は護憲リベラルに加わっている。江田、阿部の両氏だけが日本新党にいくというのである。

その日本新党だが、支持率が急下降している。社民連同様下部組織がきわめて弱く、浮動票頼りの党だけに「バブル人気の崩壊」というマスコミの評が当たっている。共同通信の支持率調査では三月の一三・二％に対し今度（五月二一、二二日の調査）のは四・六％という下落ぶりである。マスコミがつくり出したバブル人気も細川前首相の辞任やら佐川一億円受授でのウソ発言、証人拒否などで消え去ろうとしている。その消えようとする日本新党と合併する江田、阿部氏らのねらいは、新生、公明主導の新々党へ、社民連、日本新党、民社党と一体となって参加することにある。弱小政党が一つになって、より数の多いことで存在を認めさせようというわけだ。一・一ラインの作戦に社民連が合併することで日本新党の分裂に歯止めをかけ、民社の動揺をも止めるものにしたということであろう。しかし社民連にそんな力はなく結局江田、阿部両氏の小選挙区制のもとでの選挙地盤の確立にほんとうのねらいがあることにまちがいない。

日本新党は現在十億円の借金をもっているといわれている。したがって細川党首はやめるにやめられないのである。江田五月氏や小池百合子氏が小沢を頼りにするのわかるような気がする、というのはマスコミ関係者の多くの意見である。

（社会通信政権研究班）

都本部統開大会の経緯と展望

——護憲東京ネット 小峰雄蔵——

- 一、連立政権離脱を党再生の好機とし、二度と「安易な連立政権」に与しない。
- 二、消費税率引き上げ反対、柿沢外相・熊谷官房長官、永野法相発言糾弾の国民運動をおこし、現行選挙区制度での解散・総選挙を要求する。その立場に立って、党の独自候補擁立を準備する。
- 三、連立政権発足にあたっての、「確認事項」は、小沢路線そのものの解釈改憲を含み、また間接税率引き上げを明記しているものであり、社会党はこの確認事項に反対であることを国民に明らかにする。

これが護憲東京ネットの今次都本部大会に臨む基本的態度であった。この背景には、もろこれ以上我慢がならないという怨念とも言うべき護憲派党員の都本部執行部に対する怒りと護憲の党への深い思いがあった。PKO法に反対する独自の闘いを何ら組織もせず、そのうえかつて中曽根選挙に駆けつけて応援をした改憲論者森田健作を党内論議の機会を与えず強引に決定し、これに反対する良心的護憲派党員をことごとく統制処分に付し、しかも衆院選、都議選の大敗北に対しては、謙虚な総括も組織する事なく、また近くは本年一月の党全国大会において、基本路線の抜本的見直しや、党名の変更などデモクラ派顔負けの破廉恥な修正案を臆面もなく提出し、全国の仲間から冷笑どころか嘲笑さえされる始末、とても恥ずかしくて全国の仲間に向向けもできない始末だった。

直近の例では、東京宣言なるものを画策し、美濃部革新都政に始まる一連の革新自治体選挙も誤りであったと総括（さすがにこれは党内の批判を受け、撤回したが、穏健、無味無臭、人畜無害の中性宣言となって、今次大会で承認されたが）、連合右派幹部の言いなりになり、結果として営々として築き上げてきた都民の信頼を、みるみる内に崩壊させてきた都本部執行部に対する党員一揆の反乱がおこるのは、いわば当然の帰結であろう。

しかしここへきて全通、全電通などの直轄党員が二〇〇〇名近く大量脱退したことによって、都本部大会の様相は変わった。私たちはこれを好機ととらえ、ネット内に都本部対策委員会を設置、標的をデモクラ派におくとともに、党内中間派のアース（主に元都議、区議などを中心に組織されているゆるやかな共同体）との連携を模索し、この間約一カ月に及ぶ粘り強い話し合いを重ねて来た。このアースは派閥とは言いがたく、あるときはデモクラ派とも会合するなどいわばナマコのようなもので正体不明、どこまで責任がとれるのか不透明な性格を持つものであるが、なかには真面目な党員もおり、それなりに非民主的な党運営に不満をもっている。

交渉は忍耐の一語に尽きた。代議員総数は純粹デモクラ派一〇〇、護憲ネット一〇〇、アース六〇〇八〇という構成のもとでは、取らざるをえない選択の道であった。しかし本質は解釈改憲派と護憲派との路線闘争である。協議不成立の場合は護憲派は全面的対立も辞さない。

私たちは、この間市民、労組の先頭になって護憲、平和を闘っている前衆議院議員斉藤

一雄氏に出馬を要請、これを快諾された斉藤氏の勇断に深い敬意を表したい。全面対立になれば全く勝ち目はない。敗北は必至である。しかしあえてこの道を選んだのは向かう気の強い江戸っ子気質だけではない。都党護憲派の存在を党内外に明らかにすることによって、次への展望を切り開く確固とした決意によるものである。

2. 大会当日午後六時半になってもアースとの協議は成立せず、ついに時間切れとなって、私たちは斉藤委員長、副委員長、書記長、執行委員など全面的に対立する立候補届けを専管に提出した。ところが大会運営委員会は中央本部の悪例を踏襲、一方的に受付時間を翌二日目の一時まで延長、さらに続開大会の六月二十五日と延ばしてしまった。

大会で承認された受付時間を勝手に延長するなど小学校の学級会でも許されない非民主的運営を行うなど、あわてふためく末期的姿がそこにある。立候補者の氏名はプライベートルトにかかわるとの理由のもとに公表されていないが、一説では副委員長定数四名に対して十一名も立候補、このうち何を血迷ったかデモクラ派は六名も立候補するなど、無統制な混乱ぶりがうかがえる。

大会は続開六月二十五日。今後調整と称する様々な妥協工作が陰湿にすすめられるだろう。既に、連合都五単産が調停?にのりだすとのうわさだ。闘いが熾烈化すれば様々な意見が飛び出す。わが護憲派も決して一枚岩ではない。党団結論による部分妥協意見もあれば、執行部三分の一確保など「よりました」論もある。しかしこのような議論が飛び出すたびに、兵庫や、島根の護憲派議員の闘いが引き合いにだされ、仲間に関連しようとの意見が出された。

護憲ネットのもつ連帯感、それが代議員の心に深く響いているのだ。私たちは、護憲と改憲派と路線闘争という原則に立ち返り、今までの経過を大切に迷う事なく、原則的な対応を維持する事が基本だ。近く党中央委員会が開催される。恐らく連立政権無条件復帰論が出され、小選挙区による選挙方針が提案されるだろう。護憲派左派切りが始まる。それに備える闘いが今望まれている。首都東京での闘いはその一環である。

◇ 瓢箪(ひょうたん)から駒(うま) ◇

律令国家の構造

天武・持統によってその基礎が置かれた律令国家は、どのような構造を持っていたのだろうか。近年、大量に発掘された木簡の分析によって、この頃の話は、中世よりも詳しくわかるようになってきている。

税II調と庸

まず、その収入。律令制国家の税制の中心は、調と庸である。調は、本来、地方から献上されたミツギモノであり、繊維製品をはじめとした特産物である。成年男子に人头税として賦課された。又、非農耕民に課せられていた海幸、山幸などの鬻(ばい)は、調に吸収されることなく、別に存続していたことが平城宮出土木簡(荷札)から明らかにしている。

この調の布は、弥生時代の布の倍の幅のものが指定されており、各戸の織機では作成不

可能なものだけに、在地豪族の首長等が持つ生産手段によって労働力が投入されて納入された可能性が高い。律令国家は、中央権力が人民ひとりひとりを掌握・管理しようとしたが、広幅の布の要求によって、逆に、人民が地方豪族の管理下に入ることを準備していった。

京・畿内の民には、調は布のみ課税され、その量は畿外の民の半分であった。

調は、都への運搬まで含めて地元負担であり、たとえば伊豆大島からのカツオブシの調は、いつ出発して、二三日かけて到着せよ、というように細かいところまで決められていた。庸は、京畿内にはかけられず、畿外の民にかけられたが、その庸を財源として、京畿内の民は、強制的雇用労働にかり出された。

この庸による雇役の他にも、地方から徴発された仕丁の生活費は地元負担とされた。

このほかに、地方では朝廷から派遣された国司の指示によって郡司―里長が徴発する雑徭があり、年間六〇日、道路や橋、池、水路堤防などの地方整備に必要な労役にあてられた。

調・庸を都へ運んだ道は、地形を無視して直接的に引かれ、そのために運搬の途上で死ぬ民もあった。中世の道路が、地形にそってくねくねと曲がっていたのとは対称的である。

このため、机上の計画にくるいが生じる。やがて米などの重量物を中心に、水運への傾斜がみられるようになる。

租は、本来の共同体が初穂料として納めたもので、飢餓への備えや、老人・飢貧民への支給にあてるもので、税率は三%であった。

大和朝廷は明確な目的税として、調・贄・庸・雑徭・租を賦課していた。

正倉院文書の中にある「出雲国計会帳」は納税者数と非納税者数の内訳を書いた大帳・脱税者をまとめた括出帳、逃亡後六年経過した者を記した逃亡満六年帳、奴婢所有者変更の割付奴婢帳、親の喪服中の徭役免除者を取り出した遭服人帳、高齢者のいる家族と身体障害者に対する免税のための高年及残疾以上帳などの詳細な報告上申文書であるが、天平六年（七三四年）のおどろくべき行政管理ではある。

軍役

軍役はどうなっていただろうか。

律令政府の下には、左右兵衛府、衛門府、左右衛士府の五衛府が置かれ、天皇の勅によって発動された。兵衛は大化前代の舍人の流れをひくもので、地方郡司や中央下級官人子弟によって編成され、天皇や皇太子の身辺警固を任とした。衛門府の方は、大和朝廷以来トモ（伴）として宮城警備を行ってきた氏が所属し、宮城諸門の開閉と警固にあたった。

地方諸国の軍団から徴発され、京に送られた衛士たちも、京内の警備にあたった。

この他に、天皇親衛郡として授刀舍人ができるが、これは、皇位継承をめぐるトラブルには五衛府の軍事を期待できないために作られ、藤原氏がその実権を握った。

諸国には国司の監督する軍団が置かれた。この軍団は、中央の五衛府との間に衛士を上番させることはあっても、直接的な指揮命令系統はなかった。

軍団制の見本は、唐の折衝府であるが、唐の軍隊が中央の衛府の直接指揮下に置かれ、都の周辺に配置されたのに対し、日本の軍団は、全国に均等に置かれ、国司の指揮下に置かれたため、都を守るという機能が弱かった。

藤原京や平城京が四囲を城壁で囲まなかったことと合わせて考えても、軍団設置の目的が内乱からの都城防衛にはなく、対外戦争の際に動員できる兵力の確保にあったことが明らかだろう。

軍団は、成年男子三人に一人の割合で徴発されたが、常勤で、これほどの労働力を差引いたのではなく、その十分の一程度の者が一定期間、交替で勤番した。

平城京跡に立つて歩いてみると、国内の富と権力集中の表現であるその巨大な力が実感される。夜明けとともに、一万人の官僚軍が出勤する風景は、どんなものであったのだろうか。

聖徳太子の十七条憲法には「群卿百寮、早く朝りて、晏く退でよ」とあるが、中大兄の父舒明の頃には「卯に朝りて巳の後に退でむ。困りて鐘を以て節とせよ」となつて、六時から十時までの四時間勤務を決めている。中世の人々が四季によって変可する不定時法を採用していたのと違い、古代律令国家は、水時計による定時法を採用していた。

時間にうるさい国民性は、中央集権の時代の副産物であるかもしれない。

官人

官人は常勤で六日ごとに一日の休暇をもらう長上官（カミ・スケ・ジョウ・サカン）と非常勤の交替勤務である番上官に分れる。

番上官は年に一四〇日以上出勤で昇進の資格を得、半年に一二〇日以上出勤すれば季禄が支給された。

しかし、五位以上と六位以下では大きな差があつて、六位以下の官人には出勤日に支給される食事の外には、半年に一度の季禄のみで、その額は正六位で米に換算して一年間に八・八石〇一三三〇kg、従八位では四・四石〇六六〇kgでしかない。国産米の値上りで十kg九三〇〇円としても正六位で一二万七千六百円、従八位ではその半分である。

これでは、やってゆけないことは明白である。したがって、下級官人たちの生活は、家族のいる本籍地での農業経営に依存していたと考えられる。下級官人は単身赴任が多かつた。官人は毎年勤務評定されており、その木簡が大量に出土している。

下級官人のうち写経生の賃金は布施と呼ばれたが、これが出来高払いであつたため、彼らは日の出から日没まで、座して写経をしていた。平城京の中に六〇坪ほどの土地に平屋の家をあてがわれていたが、写経の仕事に入ると宿舎で寝泊まりし、二〜三ヶ月に一度二〜三日、帰るといふサイクルで働き続けた。

このため、足の病気や腹の病気にかかり、休暇願として提出した木簡が多数出てきている。おそらく、本籍地での経営規模の小さな下級官人達は、このような過度労働によって生活し、かつそれからの解放を昇任昇格に求めて自分自身の身体を切り刻んでいったのであろう。

貨幣の流通

平城京（七一〇年）は、藤原京（六九四年）からのリサイクルで短期に整えられたが、むしろ遷都してからの造営に大量の財と労働力が投入された。そして、この平城京造営が日本の富と権力を一つに集めたことのディスプレイであつたと同時に、律令体制崩壊の始まりでもあつた。

平城京の力役への徴発に反発した人々が本貫地を離れ、浮浪人が発生した。律令体制が考えていなかった社会階層の発生である。

離散農民の穴を補充することが可能であったなら公地公民制は存続したであろうが、結局のところ口分田が荒廃田へと化すところが増えた。これによって税収も減ることになる。又、造営工事費の捻出のために発行された銅銭も、鑄造経費をはるかに超える公定価格で無理に流通に投げこまれたため、早速二セ金が行き、「公」のピンハネを「私」が一部横領するところとなった。

貨幣と交換すると明らかに損をするというような貨幣が流通手段として機能するわけがない。そこで律令政府は、認知されない銭を無理に流通させようと奇策を考えることになる。

まず、官人への禄を^{あじふ}絶と銭で支給することから始め、銭をためて朝廷に献納する者に位階を授ける蓄銭叙位令を制定した。これは売官制であり、権力の腐敗を見せつけるものとなった。これに加えて、これまで布で徴収していた畿内の調を銅銭で納入することとし、やがて周辺諸国の調も銭で納めさせることにした。

京の住民の雑徭も銭納とし、天平初年（七二九年）には正丁（成年男子）一人につき調は九文、徭銭は一二〇文とした。

この税金の銭納は、庸による雇役日当によって得る他なかったから、離散できない事情の民は庸による雇役に応じざるを得なくなった。銅銭を無理に流通させる方法が日雇労働力の確保にもなるという一石二鳥の効果に官僚は狂喜したのである。

さらに、官僚達が考えついたことがデノミネーションである。新貨の一銭を旧価の十銭に充てるとすることによって、名目的な増収がはかられ、流通過程では旧貨の端数の収奪が行われた。十世紀末まで本朝十二銭という改鑄が実施され、流通必要量を超えた銭価発行はインフレーションをまきおこした。金属貨幣の流通においても、流通必要量を超過した分が流通外に回避することができればインフレとなる。

このような銭がまともに流通するわけがない。地方から平城京造営に徴発された労働力に支払われた銭は、帰路、食物と交換されず、路上にたおれた役民も発生した。

和銅開珎は最初銀貨として発行された。京域での銀の地金流通が下地にあったからである。もし、この民間での需要に応える形で発行が続けられたならば、中国の銭を流通手段とするような中世の姿はあり得なかったであろう。

律令国家は貨幣発行によって、その腐敗を早め、人心を集められなくなったのである。

平城遷都の前年には、すでに公民逃亡が政治問題化しているが、浮浪人の増大は、社会秩序の不安定化を意味し、この社会不安の渦の中で行基による仏教の大衆化が対応した。

(つづく)

能力主義教育をどう越える

——日教組運動の現状と課題——

①高教組の団結・抵抗力の低下にともない、学校内は、多忙化し、人間関係も分断されていっている。

②新組は、保護者に連帯するということで、学力重視の教育運動を展開している。

③主任制が機能させられ、職務職階制が強化されるなかで、管理職権限が強化されて、教師の自主性が奪われる。

④労働組合としてのコミュニティ原理が見失われるように、学校内のぬくもりがかき消されていく。

⑤これでは、いかんと状況に対抗する意識から再生産する課題が、厳然と存在している。

⑥先ず、集まり語りあうことから、現状批判は、出発していく。

一、長時間詰め込み学習の課外体制、教育工場の生産性とその論理

入試、公務員試験等に対応できる学力重視、知識を注入しつづけること、反復練習、結果が分かれば良いという学習など、教育工場ではないかと思われる我が校では、保護者が要求するといわれる、「受験体制に適應できる生徒作り」へ向けエネルギーが傾注される。この目的へ向け、少しでも良い結果をもたらすものが善とされ採用され、その体制を少しでも乱すものは、問題にもされず切り捨てられる。

目的のためには、手段を選ばないという、目的達成型のアプローチは、いわば企業利益という至上命令に集中して機能する企業の論理そのものである。成績を上げるためにどのようなアプローチがあり得るのか、今のところ、一般職員の分らないところでルールは、引かれていく。(きついことを、自分からは、やらない職員集団が存在しているのか? 「参加」は、管理側から求め切れない。主任制活用型である。)出てきたときには、ほぼ決まっております。後は、関係者でなんとか効率よく実施して下さいということだ。担任決め、課外プログラム(正規課外、チャレンジ、サマースクール、等々)、レインボープロジェクト推進委員会、英語科設置委員会、と枚挙に暇ない。新規採用者の仲間の感想にも、「これじゃ何をせよといわれるか分かりませぬ」と、あったが、突然、仕事を命ぜられる者、外される者、どちらにせよ「お上」任せという状況が続いているらしい。

恐ろしいのは、そのような管理側の独断が放置され、そのような体質が、教育内容までも浸透して行っているのではないかということだし、若い教員のなかにさえ、「指示待ち」に慣らされてしまっている例が拡大していることだ。生徒自身のなかにも、はつらつとした自主性を、育成しているとは、言い難い。社会に出るためには、経過せねばならぬ過程という仕方ない状況が蔓延している。自主的な創造は、むしろ好まれないほうが多い、逸脱した部分のみクローズアップされがちになる。

悲しいことは、そういう状況のなかで、つい自分を守るので精いっぱいになること、信頼していた仲間からも、苦し紛れのことを投げられてぐさり、多分自分も同じ事をするんだろうと思ひ直しはするが…。仕事を決める会議は、最悪、仕事の押し付けあい、みな苦しいからだ。分かつては、いるけど、今は、それしか出来ぬのだろうなと思う。

また、仕事をしてないと見られると、辛く当たられ、排除されそう。それでみんな仕事をしないで不安になるのか、せめてしているふりをする例もありそうだが…。一般的に多忙を買って出ること、新組を中心に病人も出がちである。

かくして、このような非人間化の状況にあっても、仕方ないという意識の裏側にあるのは、現状肯定と、逸脱者への冷たいまなざしではないか。決して、人権確立に積極的な意欲は見られない。おかしいことにおかしいと反応できてこそその入権意識であると思う。このような状況における意識は、決して民主主義とは関連しない。何時重大な人権侵害が引き起こされてもおかしくない状況を生み出している。

2、分会運動は、どうなっているか

持ち時間二〇数時間になっても、忙しいといえながらも何とか過ぎていく。校内は、予算執行も節約され、荒れてしまっているのに、仕方ないと放置されている。このずさんな状況が、教師の心にも及んでいるのに、いらいらするばかりで本当の原因は、仕方ないと放置してしまっている。

分会会議は、必ず週一回開催してきたが、連絡が主で、独自の校内論議は、いささか弱い。しかし、これではいかんと、続けてきた。一番きつかったのは、このまへの選挙のときだった。協定要請をするたびに分会会議の参加が減る。このことに対する意識もまた荒んでいったと思う。「社会党が、これだけ変わってしまったら。」「どうせ国民から支持されていない。」「それでも、支部目標は、何とか達成したいがいがななものか…。」

せめて救われるのは、この頃、分会会議の参加も回復し、こちらが動けば、出来ることは、何とかしてくれるようになってきたこと。(動員は、駄目) 非公然に、アンケートを回してくれたら、やれば出来るじゃないかと思ひ直してみている。続けることが、何らかの力になるだろうというところ。

3、コミュニティの優位性「ぬくもり」や「暖かさ」を対置

高教組運動の精神は、権力との闘いで、鍛え抜かれた、「暖かさ」だと思ってきた。厳しい闘いのなかに、仲間を大切にするという自然があった。今は、闘いは、非常に難しい、同時に仲間が見えにくくなってきている。周囲の仲間にも気遣ってもそれがどう受け取られているのかはつきりしないほど、校内は、機能主義的な多忙化で活性化させられ、心が磨り減ってきているような気がする。分会員もそのなかに例外なく巻き込まれている。ちよつと気を抜くと、人間関係も何もかも吹き飛ばされる。支え、支えられているという安心感が、持てなくなってきた。

まず、自分からと頑張ろうとしても、分会会議を回すのが精いっぱい、悔しくなる。だが、ここでつぶされてなるものかと、肩を張らずに静かに決意することかと思う。肝心なことは、自分が伸び伸びする空間を拡大すること、それを阻害するものとは、同じ思いを持つ者どうしで克服の方向性を明かにしていくこと、今は、周囲の仲間たちと、権力に対する悪口を言いあうだけだが、ここで、止まらんと静かに心に誓う現在である。

年取った仲間の言葉、「人間そうかわらんとじゃないと」に励まされ、思い直させられ、親組優位の学校運営のなかに展望を探る。

拡大する非常勤雇用

—— 郵政における非常勤雇用の問題点 ——

1、非常勤大量雇用への道

郵政において非常勤が大量に雇用されるようになって十二年程になる。それまでは年末や夏期繁忙で学生アルバイトが多数雇用されてきたが、平常時はごく少数が雇用されていたのみである。

平常時にも多数配置されてきた理由として「バブル経済」時に、郵便物が異常に増えたにもかかわらず行革攻撃で職員増が困難なため、事業効率化（合理化）で非常勤雇用の方が経費が少なくて済むことがあげられた。

そしてそのための対策としてとられてきたのが「集配立て区分方式」である。これは、配達区分ごとに横に並べていた作業を、立てに番地を区切って並べていくという区分方式の簡略化により、非常勤を受け入れる態勢を整えてきたことや、郵便課における差立て区分の都内統一化によって、作業が覚え易くなり、「人事交流」がしやすくなったことなどがあげられる。

そこで当時、組合員から言われていたことは、「これで信書の秘密が保てるのか」ということや、落ちた切手をとるなど「軽微な犯罪」でも「非常勤だからやめさせればよい」という雰囲気が強かった。

2、組合要求としての非常勤雇用

非常勤雇用になれてくると、長期病休者がでたとき、集荷サービスなど新たな施策で要員が必要なとき、事業所が増えているため、あら分け要員・大口抜きだしなど、とにかく要員の問題があれば非常勤を「何人よこせ」という要求に傾斜している現状である。

3、現状の問題点

勤務の違いから、本務者は、到着・パレット作り・事故・機械・大型などの作業、非常勤は差立て・機械補助・料金・深夜機械などの作業が主となり本務者と非常勤の分業化が進んでいるということである。

非常勤は、固定勤務であり、当局は使いやすく、毎日が同じ仕事となり、専門的になる。料金ひとつとっても、「後納」の別扱いとか会社によって違うため、本務者がたまに入ってもわからないので非常勤が本務者を指導したり、「ここはいいから」とはじかれてしまう状況も生まれ「分断」がすすんでいる。その「分断」は「本務者から非常勤をみる」傾向になり、「暇なときを予測した出勤の増加」や「なるべく楽をしよう」という非常勤を意識するようになる。

4、非常勤の立場と意識

非常勤の立場をみると三つの構成からなっている。

一つは、フリーターが増えてきたことである。音楽教師や自営業など他に仕事をもっているが、収入が足りなくて来ている人や、劇団員・留学予定などの人は定職に就いていないが、将来の目的につまづいて、フリーターとして郵便局に入ってきている。

二つは、主婦・パート層である。家計の足しにすることが主できているが、夫が郵便局員・管理者という人も結構いる。

三つは、学生層である。郵便局だと親が安心して許してくれるという傾向もあるが、そのほとんどは小使い欲しさである。そして大学・専門学校（地方出身者）に通っている人は深夜勤につく人が多い。

5、郵便物減少と非常勤の立場

郵便料金値上げによる郵便物の減少が言われ、そのことにより、要員削減がだされ、非常勤の整理がいわれてきている。

また、「時間制職員」の試行が言われているが、ますます固定勤務が強まり、逆に本務者は深夜勤の傾向が強まるという危機感の中から、「やめてくれ」という意味が強い。そこで非常勤問題をどう考えるのか。「同じ労働者」として見なければならぬが、しかし、職場現状から言うと、「本務者から非常勤を見る」傾向が強まっている。

郵政短時間職員の概要

(1) 目的	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 事業における労働力の効率的配置と安定的確保 ◇ 高齢者や女性の就業機会の拡大
(2) 職務内容	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 内 務：早期の配達準備作業、夕方の発送作業 ◇ 外 務：団地配達等
(3) 任用	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 選考採用（採用試験実施） ◇ 条件付き採用期間適用（6月） ◇ 勤務評定実施 ◇ 任期2年（更新可）、採用年齢十五〜六三歳
(4) 服務	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 兼業届出制
(5) 勤務時間	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 1日4時間勤務、四週八休制
(6) 処遇	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 月額制給与支給 ◇ 勤務成績良好者への昇給実施 ◇ ボーナス支給（支給月数↓常勤職員の六十％） ◇ 厚生年金・健康保険・雇用保険に加入予定
(7) 採用人員	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 人員：三二九人 ◇ 東京及び関東郵政管内において、十月に採用

リストラなんかに負けられないゾ

昨年の七月、無線業務の見直し・中央OPCの一元化に伴い、多くの仲間達が営業等に配転されました。ある人は強制的に、またある人は嫌々ながら、会社の思惑どおりに事は進められました。労働組合の協力の下に。そして今、地域支店の設備運営等業務の切り出し、TE会社への出向、情案部門の集約・営業部門への配転、テレカ会社への切り出し等々が、「新たな経営改善策」の名の下に、労働者の生活と権利を無視して強制的に行われようとしています。会社都合の押し付けを許さず、働き続け、生活を守り続けられる職場にするため、闘い続けましょう。

合理化のとき、頼りにならない労働組合

大不況の中、多くの企業で組織統合・廃止、労働者首切りのリストラ（事業再構築）合理化が進められています。

こういう時、不況の犠牲をすべて労働者に押しつけようとする会社から守るために存在するのが、労働組合のほうですが、残念ながらその役目を果たしてはいないようです。

連合が実施した組合員の意識調査にも、その実態が反映されています。「合理化、首切りのとき、組合は守ってくれる」とかとの質問に、「そう思う」人は二三%しかいないのです。「どちらといえばそう思う」人を加えてやると過半数を超える状態です。「不利な転勤・出向のとき頼りになる」とかという質問になると、更にひどく、「そう思う」人は「どちらかといえばそう思う」人を含めても、四四%にしかありません。

労働組合員としては、なんとも情けない結果ですが、私達の職場での状況を見ると、うなずける気がします。いやもつと酷いんじゃないか、と思う人も多いかもしれません。「もう、組合なんか無いと同じだよ」という声も少なくありません。しかし、このままでいいとは思ってはいないはずです。

どこでも同じ手口、「希望」は建て前だけ

昨年十二月、ある地方都市の番号案内の職場で、テレコム営業への配置転換が実施されましたが、「希望者のみ。強制配転はしない」「希望は全員にきく」という労使確認があったにもかかわらず、会社は狙った人達だけを会議室に何回も呼び出し、配転を強制しようとしたのです。去年、私達が経験したのと同じことがどこでもやられているのです。

組合のオグレル資料でもいうように「番号案内のトラヒックは順調に回復し、平成七年度には有料化前のトラヒックに回復する。一方情案部門の人員状況は必要人員を下回る状況が生じる可能性がある」という状況の中で、会社は番号案内職場を廃止・集約する一方、ベテランを営業へ強制配転し、アルバイト・パートへ切替えようとしています。今、会社が考えているのは人減らし・首切りだけです。

それでも抵抗を続ける仲間達

こういう中でも、こんなことは許せないと、「強制配転は止める！希望者はいない。計画を白紙撤回しろ」と仲間達は最後まで闘いました。強制配転はされましたが、何人かの病弱者は残ることができました。

また、ある線路の職場では、TE会社への事業分割に伴い、二十数名の半数を外向させるといふ計画が提示されました。管理者達は（NTTに残っても仕事はない。TEに希望すを出せ」と、外向「希望」を強制してきましたが、仲間達は「片道切符の出向なんかイヤダ」「課長がいくらいおもしろい事を言っても、子会社であることに変わりはない。やっぱり本体に残りたい」と頑張っています。この職場では、四年前にも強制配転があり、腎炎の若い仲間が長距離通勤で命を奪われたり、転勤後二ヶ月で退職した仲間が出たりしました。会社の言いなりになっていたら生活は守れないのです。

仕事でほとんど切り出される中で、外向した人も、残った人も厳しくなっています。

電通共済の支払い状況（九二・九から九三・七）では、この十一月間で、本人死亡が三五八人となっています。年齢別では、四五〜四九歳で一〇九人、五〇〜五四歳が六四人、四〇〜四四歳が六一人です。

配転によって、「下痢が止まらない」「不整脈がでるようになった」「急性胃炎になった」などと訴える仲間も多くなっています。

職場の回りを見渡し、安心して働らせる職場にするための改善要求を作り、改善させ、会社の甘言に惑わされず、仲間とともに労働者を無理やり職場から追い出す統廃合に反対し、強制配転を拒否し、「元の職場に戻せ」と闘い続けましょう。

九四春闘の収支決算

連合が主導する「九四春季生活闘争」は三・一％の水準で決着した。これは約四十年間の春闘史上最低の水準である。連合は「春季生活闘争」指針で、消費者物価上昇率一・二％に定期昇給二％を上乗せした三・一％が実質賃金確保で最低線とした。賃金要求の目標を五・六％としていたから実質賃金確保すら出来なかったことになる。昨年に引き続き、実質賃下げである。

賃金は世間相場が賃金決定に大きく影響する。時には経営陣が言う「支払い能力以上に出す」ことさえある。史上最高のベア（三十二・三％）であった七四春闘後財界の労組対策機関である「日経連」は「大幅賃上げの行方研究委員会」は春闘相場の具体的数値を出すようになった。

七五春闘には一五％以内のガイドラインが出され翌年の七六春闘は二桁台と経営側からの相場づくりが貫徹されている。それを許してきた「労働側責任」の自覚は弱いと思う。連合発足後、労働側は長期化する不況打開のため「賃上げによる消費回復」を主張している。この賃上げ理論はそもそも労働者の生活実態からはかけ離れたもので労働組合にはそぐわない。実際、九〇春闘以降は要求額の獲得率すら下がってきている。労働組合が本気で取るうとしてないと言っている。連合も賃金は産別自決などと言って労働側からの賃金相場づくりをやっていない。「政界再編」などにうつつぬかしている一方で、日経連は「日本の賃金は高い。毎年の賃上げはせず、物価を下げるべき」といつている。この先は定期昇級すらいらぬと言いつつ出さるだろう。

「こんな春闘なんていらぬ」「今の労働組合はダメ」の話も聞く。駄目な春闘と組合が本当になくなる日が来る恐ろしさもある。

自信の表われ、面白くなった「闘争団ニュース」

国労闘争団のニュースが最近実に楽しく明るい。その一つ上京団ニュースを紹介しよう。旭川闘争団もこれまでかたくむずかしい活字がならんでいたものが、このたびは一変。楽しく動きがあるものとなった。電話でたずねてみたところ、「こんな視点で闘いに参加してもらいたいと思ったから」と、語る言葉に自信が感じられた。留萌闘争団も石けんづくりの事業に着手。市の協力を得て、機械を購入、廃油の回収も。廃校となった小学校で額に汗して働く姿がその熱の入れようが伝わってくる。

紋別闘争団も、団員の手がきの便りをのせ、長野の支援共闘の仲間とのつよい絆の闘いが勇気をあたえてくれる。

どの闘争団も団員一人一人がお互いの自発性と気持を大切に、四年間の自らの成長に自信をもってしていることにハッとさせられる。

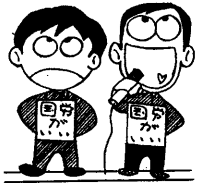
第7次上京団ニュース

1994年3月29日
NO. 49
発行責任者 原田 匡
編集責任者 上京団事務局

7月 上京団ニュース

3・25 ストライキ行動に参加して

佐賀闘争団 西山輝彦



3・25ストライキで新幹線支部の一日行動に釧路闘争団の村越さん、佐賀の西山が参加しました。

朝9:00より国労会館8Fで会場からあふれる熱気の400名参加で突入集会が始まりました。

山本新幹線支部長のあいさつの中で、2名の仲間の国労復帰が報告されました。

午前中は「地域署名」、午後は小島中園の講演、映画「闘いの足跡」、闘争団・各分会からの報告等が行なわれました。

特に2名の復帰者のあいさつで「もっと早く復帰しなければいけなかったが、今日は感無量です。」と報告され感動を受けました。

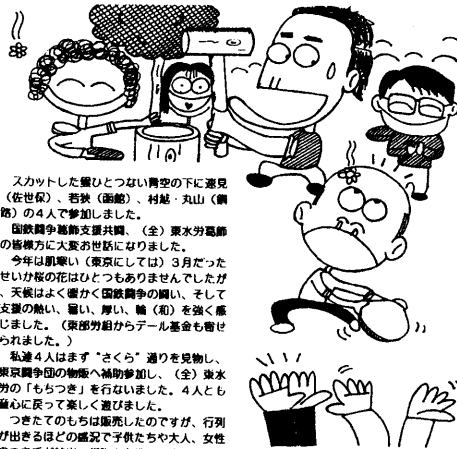
佐賀では国労組合員が少ない中、こんなに多いかと元気が出てきます。

帰って闘争団の仲間に報告し、「JR復帰」まで頑張ります。



第5回高節さくらまつりに参加して

3・27 釧路闘争団 丸山義彰



スカットした髪ひとつない男空の下に遠見(佐世保)、若狭(函館)、村越・丸山(釧路)の4人で参加しました。

国労闘争団助成支援共闘、(全)東水労臨時の梅津方に大家お世話になりました。

今年は前年(東京には)3月だったせいか桜の花はひとつもありませんでしたが、天候はよく暖かく国労闘争の闘い、そして支援の熱い、暑い、暑い(和)を強く感じました。(東部労組からデール基金も寄せられました。)

私達4人はまず「さくら」通りを見物し、東水闘争団の物販へ補助参加し、(全)東水労の「もちつき」を行いました。4人とも盛んに笑って楽しんで遊びました。

つきたてのもちが販売したのですが、行列が出るほどの盛況で子供たちや大人、女性のつぎ手が続出、形取の女性も出ました。

一日皆無と共に楽しく過ごす事ができ、ストレスも少しは解消しました。

解雇闘争・地元JR復帰の団結カンパニーで乾杯し、一日が終わりました。

やはり闘いは元気で明るく、楽しく、そしてしたたかに感じました。

◇ 読者からのおたより ◇

貴誌で元気に 貴誌のがんばりには敬服いたします。マスコミ、商業新聞等にかたよりがちですが、少数派のなかで貴誌を読みますと考えさせられ、また勇氣つけられる思いがします。がんばってください。

(千葉・W)

編集部より おたよりありがとうございます。日本のマスメディア、ジャーナリズムの精神はどこへ行つてしまったのでしょうか。つまらぬ記事をたれ流すだけ。枯葉に迷わされず幹を押さえることが肝要ですね。

たいへんな郵便料金値上げ いつもわれわれのわからない政治、経済、労働などについてニュースをありがとう。このところ郵便料金値上げでお互いにたいへんですが、がんばりましょう。

(東京・N)

編集部より 公共料金値上げ反対の先頭に立つのが日経連なんですから、世の中すつかり様変わり。この動きは行革、賃金抑制につながります。

春闘の教訓 九四春闘ではわれわれが失っているものがはっきりしました。われわれはイデオロギーを失い、したがってまた未来を失っているということです。もう一度、われわれの目的をはっきりさせなければなりません。そして回りのいろんな事象に関心を持ち、刺激され、感動することから始めなければなりません。伝えたい感動があるということの素晴らしさをつかまねばなりません。

(自治労・R)

編集部より 同感です。私たちに欠けているのは感動です。必死さです。人の心をつかむ精神の欠如です。「自分の頭で考える」とはこのことでしょう。

ただいまリハビリ中 入院で誌代が遅れました。ただいまリハビリ中です。今後とも国鉄闘争勝利のため貴誌を愛読します。中労委の命令は許せません。

(国労・M)

編集部より 手術たいへんでした。ゆっくり身体やすめてください。そして精神も豊かにしてください。これからやらねばならぬことたくさんありますから。

まだまだ心配な社会党 社会党の「政権離脱」は当然です。「護憲」、「消費税反対」を明確にしないのでは、これから先がまだ思いやられます。

(山形・W)

編集部より おっしゃるとおり。政権離脱でよかつたよかつたとの声が強いのですが、書記長、委員長の発言、デモクラッツの輩の動きは予断を許しません。連立政権参加への道がさぐられるはずです。そのとき社会党は正念場です。

桜満開 社会党の連立政権離脱で胸がスーッとしました。反消費税と護憲の道に全力投球するのが一番です。今、青森は桜が満開でみな浮かれています。

(青森・S)

編集部より 掲載が少し遅れすみません。今は新緑がきれいでしょうね。若葉のように伸びるだけです。お力をお貸し下さい。

俺の靴 雨が降る 傘をさす 足元が染みる／家に帰る 靴底が薄い 縫い目が裂けている／寿命が来たのか それで泣いているのか／ありがとう 俺の靴よ ありがとう 感謝をこめて ビニール袋に包む

(一九九四年三月八日 M)